News Letter

第16号

京大農薬ゼミ

目次 Contents

1 みかん山だより

・ミカンの天気 ・・・ 2
・下津の遍歴 ・・・ 3
・省農薬ミカンにのせて ・・・ 6

2 メンバーの活動から

・『野菜市の会』 ・・・ 7

3 ゼミの活動から

・団地調査の報告 ・・・ 9
・今年の農薬ゼミ ・・・10

ミカンの天気

西原啓史

今年 2004 年は本当に自然災害が多い一年でした。とりわけ、新潟、福井、三重、京都と相次いで起こった水害や、浅間山の噴火、新潟中越の地震など大規模な災害が、夏以降立て続けに起こり、被災者の姿に心が痛みました。一日も早い復興を願ってやみません。

さて、このように自然災害が多発した今年のミカンの出来はどうだったのでしょうか？ミカンへの被害と聞いて、愛媛県や熊本県で起こった台風によるミカンの塩害のニュースを思い出す方もいらっしゃるのではないでしょうか。ミカンの実は他の果実よりも比較的小さく、また木にしっかりとついており、腐らなければ春先まで木から落ちないことからも分かるように、台風などの強風による落果という被害はほとんどありません。しかし、もともと温暖な気候の植物であるため、海に近い暖かな耕作地が好まれ、強風による塩害―潮風害―が台風襲来時にしばしば発生します。潮風害とは、台風などの強風によって枝や葉が互いに擦れあって傷がつき、風に乗って海から飛んできた塩分が傷口から組織内に入って細胞が被害を受けることで、落葉したり、落葉しないまでも葉が部分的に生理機能障害になったりするものです。さらに葉の表面に付着したままの塩分も、表層付近の組織に同様の障害を引き起こします。このため、台風がいくつも上陸・接近した四国や九州では潮風害が多く発生し、一部の木が枯れてしまったケースもあるようです。幸い本ミカン園は、海から離れた山の山頂付近にあり、潮風害の被害はありませんでしたが、ミカン園をつくっておられる仲田さんのお話では、同じ下津町でも海に近い平地のところでは潮風害が少し発生したそうです。また、台風の強風により実が枝などと擦れあって傷がつき、見た目の等級が落ちるという被害も多かったのではないかと思います。

ミカンの木は、一年毎に豊作と凶作（それぞれ表作、裏作という）を繰り返す隔年結果性を持っていますが、それが市場全体の出荷量にも現れます。今年 2004 年は裏作の年です。この原稿を書いている時点では、まだ農林水産省の「温州ミカン生産出荷予想」は出ていませんが、私の個人的予想では、台風の被害でジュースにしかならない見た目の悪いミカンが多く、また潮風害の被害もあって出荷量が伸び悩み、値段も平年より高めになるのではないかと思っています。（あくまで個人的予想です）

もう一点気になるのが、やはり味です。ミカンの味には降水量が大きく影響すると言われています。ミカンの実の成長が終わり色づき始める、9 月中旬から 10 月に雨が多いと、果肉の中の水分が増え果汁が薄くなり、果汁の酸っぱさや甘みも薄い、いわゆる水っぽいミカンになると考えられています。今年は台風とそれに伴う秋雨前線の影響で全国的に 10 月は多雨になりました。和歌山で見てみますと、平年の 10 月の降水量は 111.9mm ですが、今年は倍以上の 278.5mm を記録しています。そのため、今年のミカンの味は少し薄くなっているかもしれません。ただし、この省農薬ミカンの様な酸っぱいミカンが苦手な方にとっては、酸っぱさも薄くなっていますから、食べやすくなっていると思います。

このように太陽の下で営まれる農業は、天候に大きく左右され、その価格も大きく変動します。しかし、それでも変動しないものが、“いつでも同じもの”を求めようとする消費者の心です。そのような消費者の心が影響しているのかは分かりませんが、昨年から収穫前の農作物が盗

まれる事件が続発しています。先日も京都で白菜やほうれん草が盗まれたというニュースを聞きました。台風や大雨に負けず丹精込めて育ててきた野菜を収穫前にごっそり盗られ、悔しさがテレビから滲み出ていたお百姓さんの顔が忘れられません。

この年末、天変地異の一年を振り返り、私たちは新しい年の平穏を願いながら、新年を迎え、たくさんのお祝いの食べ物を前にするでしょう。その向こう側には、私たちに喜んで食べてもらえることを何よりの喜びとしている生産者の微笑みの顔があるのでしょうか？（にしはらけいし＝農学部４回生）

生産者：仲田芳樹

今年の使用農薬

・ラウンドアップ（除草剤、3/27・29 使用）
・ジマンダイセン（殺菌剤、500 倍希釈
1 回目 5/28・29、
2 回目 6/23・25 使用）

下津の遍歴

脇田千鶴

皆様の元へお届けしたミカンのふるさと・下津町は、和歌山県の北西部に位置し、海南市、有田市、金屋町、吉備町の市町村に隣接しています。この下津の町がどのような遍歴を辿ってきたのか、現在に至るまでの下津とミカンの歴史を振り返ってみました。

拡大

仲田さんの自宅・ミカン園のある大窪地区

●ミカン栽培のあけぼの

加茂谷（現在の下津町初島町）における柑橘栽培のはじまりは、室町末期頃と思われます。現存する史料で一番古いのは、『慶長御検地帳』です。検地帳作成は慶長６年（１６０１）ですが、記録からその時の樹齢が６０歳ぐらいと考えられるので、１５４０年頃に植えられたと思われます。

●江戸時代

紀州藩によってミカン栽培が保護奨励されたこと、気候が柑橘栽培に適していること、上方に近く海上輸送が便利であったことなどから、自給的果樹作から商品的果樹作に移っていき、ミカン産地・和歌山が誕生しました。さらなる経営展開をめざし、江戸市場へと販路を拡大しました。その中で、複数の農家のミカンを一括して江戸へ出荷する「蜜柑方」という組織ができあがりました。

●大正～昭和初期

他産地の生産増加が目立ち、市場における販売競争がはじまり、品種の更新、品質の改善、経営の合理化を図らねばならなくなってきました。科学の進歩、交通の発達と共に栽培技術と販売の革新が要求され逐次改善されていきました。

品種は、紀州ミカン、八代（やつしろ）、柑子（こうじ）などから、温州ミカン、ネーブルオレンジなどの優良品種へと転換されました。魚肥のみに頼っていた従来の施肥方法から、大豆粕、化学肥料を取り入れた配合肥料などの使用に移っていきました。また、ボルドー液をはじめ石灰硫黄合剤、松脂合剤、石油乳剤、マシン油乳剤などといった薬剤による病害虫防除が始まったのもこの時期です。

●第二次世界大戦と戦後

戦争中は食糧増産に力を入れねばならなくなったため、果樹への肥料は規制され、農地作付け統制規則が実施され、強制的な主食生産への転換が行われました。ミカンは永年作物のため、終戦後もその影響が長く続きました。昭和２７年になってようやく戦前の出荷量にまで復帰することが出来ました。

終戦直後の物資不足は食料をはじめとする衣食住の充足を目的としましたが、昭和３０年頃から生活物資の供給が潤沢になり始め、昭和３５年頃から農業の分業化が急速に進み、ミカン作への単作化が進みました。

●高度経済成長期

戦後の混乱も落ち着き、全国各地で生産量が増加してきたため市場占有率が伸び悩み、下津のミカンは新規市場開拓を

C O L U M N

蜜柑’s（未完’s？）のテーマ曲・・・

「はじめましてのご挨拶　余計なことも紹介しよう ～～

当たり前過ぎる人生を　切り貼りしてこのざま
好きだと言えたら良かった　そんな記憶でいっぱいだ
がんばってやってみよう　上向いて

ミカンズ　甘くて　酸っぱい言葉　かますぜ
ミカンズ　俺達　虹の橋を渡ろう ～～」

by　スピッツ

迫られました。そんな中、昭和３４年に全国初の「ミカン専用列車」が実現し、１１月から１２月の間、東京・北海道へ毎日一便が運行されました。

戦後の果実消費の急増に支えられ全国的に増植をしてきたミカンは、昭和４３年の豊作によって急激に伸び、計画生産量を上回る状態になり、ついに価格が暴落しました。さらなる植栽により大豊作を記録した昭和４７年において、下津町では、昭和３０年を１００とした生産量の指数に対し６３０という驚異的な伸びを示しました（全国では７７４，和歌山では７９４）。そのため、ミカン農家一日の家族労働報酬（全国平均）は昭和４６年の４０９１円から、昭和４７年には１５７０円へと下落しました（『農林統計』）。

●そして現在へ

１９８０年代から、下津町では果樹農家数の減少が見られるようになりました。この原因の一つとして、１９７９年（昭和５４年）に始まった温州ミカン転換促進事業（ミカン減反政策）が関係していると考えられます。仲田さんのいる大窪集落では１９７０年に６０戸程であった果樹農家数が２０００年の調査では３０戸余りとなり、約半数になりました。また下津町では、全体的に高齢化が進んでいます。特に大窪集落では、２０００年についに農業就業者（男性）の半数以上が６５歳以上となりました。仲田さんもその一人です。

このように下津町におけるミカン栽培は厳しい現状にあるようですが、そんな中でもミカンを作り続けている農家の方々に、下津ミカンは支えられていると言えるでしょう。

＊　＊　＊　＊

『下津町よりお届けする省農薬ミカン』、農薬ゼミが３０年間使ってきたこのフレーズがミカンの注文書に書かれるのも、今年で最後となるかもしれません。いわゆる「平成の大合併」の流れの中で下津町は海南市と合併し、次の４月から新たに「海南市」としてスタートすることになったからです。一つの町名がなくなるというのは、個人的にはとても寂しいことです。しかし、新たなスタートを切る決断をした「下津町」の今後の発展を、ミカンを通して見守り続けたいと思います。（わきたちづる＝農学部４回生）

C O L U M N

神々のみかん

「神々の食」と聞くと何を思い浮かべるだろうか。お供え物のごちそう？残念、そうではない。これは、作家の池澤夏樹が沖縄のとっておきの食べ物を取材した本のタイトルである。その中に橘餅（きっぱん）という、みかんから作るお菓子が載っていた。池澤さん曰く「沖縄のお菓子で一番おいしい」。かつては王族しか口に出来ない高級菓子で、４日間！かけてようやく出来上がるらしい。長年住んでいたのにそんなおいしいものの存在すら知らなかったとは…食いしん坊の私は早速、沖縄で一つしかない橘餅の店に行き、かの品を農薬ゼミへのお土産としたのだった。さてメンバーの感想は・・甘い、堅い、白い。→いったいどんなお菓子だ？？　興味のある方は、一度食べてみてはいかが。

省農薬ミカンにのせて

石田紀郎

今年もミカンを届ける季節となり、連日、農薬ゼミの若い諸君が忙しく働いています。申し込み締め切りまであと１週間の今夜で、注文数は全収穫量の半分を少し超した程度です。あと、最低でも５００箱の注文がほしいところで、週明けには、例年注文してくれている方達に電話を入れなければ完売は難しい状況です。省農薬ミカン販売を始めた２０年前なら、この段階になると不安が先に立って焦っていたものですが、長年の商売（？）の感でしょうか、なんとかなると思えるようになってきました。たぶん、完売できるでしょう。できなければ、正月明けに追加注文をとらなければなりませんが。

大学生が主体の団体でこれほどの商いをしているグループは極めて希な存在です。何処かの農家や農地を相手にした研究をしている研究者は大学には沢山いますが、そこでの農産物の販売にまで責任を負っている研究者はまずいないでしょう。なぜ、そこまで踏み込んだ付き合いを農家としているのかを知っていただこうとの思いを込めて、ミカン箱の中にこのニュースレターを毎年入れています。

今日お届けしたミカンは外見は市販のミカンよりは少々傷が多くありますが、皮をむけば他のミカンと同じで、ときには他よりもおいしく、ときには他のミカンよりもおいしくない場合もありますが、ミカンはミカンに過ぎません。けれども、このミカンに私たちはいくつもの意味があると思っています。

まず第１番目は、言うまでもなく、省農薬で栽培され、農家の農薬中毒や農地環境の汚染軽減を実現してきました。単に数年の取り組みではなく、３０年間の実践の結果であります。市販のミカンは年間十数回も農薬を散布しますから、３０年間では４５０回にもなります。しかし、省農薬園では多く見積もっても６０回くらいです。そして、害虫退治は天敵を利用し、これからの農業の進むべき方向を示したミカンであるということです。

第２番目としては、科学的データが集積されていることです。省農薬ミカン園には約１０００本のミカンの木がありますが、その内の５００本について２５年間に亘って、病害虫発生状況と収量の調査を継続して行い、膨大なデータを集積してきました。この中から、多くの科学的知見も得ましたが、私たちが大事と思っていることは、学問的成果の多寡よりも、一つのミカン園について２５年間継続してデータをとり続けてきたことです。科学の世界はますます世知辛くなっています。短時間で結果がでるテーマを追い求め、中味はなんであれ、論文の数を増やすことが研究者の目的になっているご時世です。国立大学が独立法人となり、ますますこの傾向が強まって、長期調査を必要とする課題はないがしろにされていきます。環境問題などのフィールドを対象にする科学分野は極めて継続が困難な時代です。省農薬園の調査は、このような科学界に対するアンチテーゼだと思っています。

第３番目としては、現在の大学では産学協同研究が主流を占めつつあります。省農薬園も農業という産業との連携ですから産学協同の一環かもしれませんが、現在言われている産学協同は大企業や金儲けができる産業との連携であって、小さな農家の試みなど相手にするものではありません。大学の研究室は大企業の研究部門の一室になりさがりつつあります。我が国の農業、環境問題を小さな生業であっても、現場から問い直す試みとしての省農薬園として世に問うものだと確信

しています。

第４番目としては、農薬ゼミの活動は、観念的に環境問題は大事です、環境にやさしい農業をしなければとお題目を唱える環境団体に対するアンチテーゼであります。農薬ゼミが販売活動をしなければ生業として成り立ちません。もちろん、一部は京都にあるエル・コープという生協にも出荷していますが、大半は農薬ゼミで販売しています。ゼミが販売をサボれば農家は立ち行かなくなります。まさに、省農薬という実践を継続するためには販売から逃げられないのです。その実践を通じて、口先だけでない「農薬は省ける」という信念を表現したいと思っています。

私たちは、このミカンの中にこのような多くの意義を持たせながらミカンをお届けしました。購入していただいた皆さんがこのミカンに寄せられる意義付けが沢山あると思います。皆さんの意義付けをゼミまでお寄せくださると幸いです。意義付けなどという堅苦しいことではなくとも、また、ミカンだけでなく食糧、農業への思いを農薬ゼミに聞かせてください。お待ちしてます。（いしだのりお＝NPO 法人 市民環境研究所代表理事）

『野菜市の会』

飯塚弘明

野菜市の会は、昨年、当時京大農学部一回生だった有志数名により結成された団体です。現在、農学部、教育学部の１回生２名、２回生７名の計９名にて活動しております。これまで、２００３年１１月、１２月、２００４年１月、６月と計４回程京大キャンパス内において、生産者から消費者への橋渡しをすべく、地元の農家の方々が、無農薬もしくは減農薬で化学肥料を使わずに作った野菜を、野菜市と称して提供してまいりました。以下、野菜市の経緯などを、簡単に述べさせて頂きます。昨今、ようやく『有機農業』や『有機野菜』という言葉が市民権を獲得しつつあるかのように思えますが、化学肥料や農薬を多く使用された野菜が数多く安価で店頭に並び、有機野菜や減農薬野菜といった比較的安心して食べられるおいしい野菜は、数が少なく見つからない、もしくは、ほかの野菜よりも高価でなかなか手が出ない、というのが現状かと思われます。

そこで、そんな世の中のありかたに一石を投ずるべく、より安全でおいしい野菜をできるだけ安く消費者に届けるため、また、そういった野菜をがんばって作られている農家の方には、少しでも正当な利益を得ていただき、（少々あつかましいかとは、思いますが）多少なりとも支援

C O L U M N

みかん風呂

みかん風呂に入ったことがなかった。実はちょっとあこがれていた。お肌つるつるになるらしい（？）この秋、念願かなって、みかん風呂が実現した。場所は、もちろんみかん山。ふつうは食べ終わったみかんの皮を天日干しにして、それをお風呂につけるのだが、今回は大胆にもみかんを丸ごとほうり込むことにした。それも浴槽いっぱい。みかん色に囲まれて、すっかりいい気分。そしてお風呂からあがっても「ぽかぽか」がずっと続くのだ。これには驚いた。寒がりの私は、みかん風呂を夢見て、今日もせっせとみかんを食べている・・・

となればと思い、農家の方から直接野菜を仕入れて販売しよう、という話になりました。（実際の野菜市では、消費者の方には、カンパを頂いたり、野菜の包み方を教えて頂いたり、と何かとお世話になることが多いですし、農家の方には、毎回数多くのおまけをつけてくださったり、当日の野菜市に来て頂いて、売り方の指導をして下さったりと、私共が、ご厄介になってばかりなのですが……。） そして、幸運なことに、学外学内を問わず様々な方のご協力を頂きつつ、京大フィールド科学教育研究センターの講師をしていらっしゃる西村和雄先生のご紹介により、地元の数件の農家の方々が、無農薬もしくは減農薬で化学肥料を使わずに作った野菜を提供して下さることになり、第一回野菜市を２００３年の京大１１月祭で開催する運びとなりました。以降、先程記したように計４回の野菜市を行ってきたわけですが、それらを通じて得られた強い実感は、消費者の方々は、平たく言ってしまえば、えらそうですが、地球環境に対する配慮を思っていたよりもきちんとなさっているということです。例を挙げてみますと、一部の野菜をセロファンでなく新聞紙で包んだのですが、消費者の方から不満も聞かれませんでした。（まあ、不満があってもおっしゃらずにいるだけなのかもしれませんが……。） また、毎回ビラには買い物袋持参をお願いする文句を載せているのですが、たいていの方が持ってきてくださいますし、中には、スーパーマーケット等のビニール袋を、私たちが野菜市用にためているのに気が付いてか、わざわざくださる方までおられます。野菜市を行う前には、こういった、野菜を新聞紙で包むことや買い物袋持参に関して、消費者の方から、反発とまでいかなくともいやな顔のひとつやふたつはされるであろうと、私たちは覚悟(?)していたのですが、そのような事はひとつもなく、良い意味で裏切られた次第でして、目から鱗、いや、大げさに言えば目から涙であったわけです。

また私たちは、荒地を開墾して自分たちで実際に農作物を作る、という活動も２００４年５月から始めました。それまでは農家の方々から買った野菜を消費者に売っていただけで、何か物足りない気がしており、また、自分たちの手で化学肥料や農薬を使わずに野菜を作ってみれば、農家の方々の気持ちが少しでもわかるかもしれませんし、そうして、出来れば収穫した野菜を野菜市で提供したい、と考えて始めた次第です。

とまあ、夢いっぱいに胸を膨らませて開墾し始めたわけですが、そう簡単にはうまくいかないもののようです。私たちがお借りしている土地というのは、もともと宅地造成地として整備された２アール程の場所ですが、初めはすすきだらけの野原でした。まずはそのすすきを抜くことから始めたのですが、すすきが地表数センチ程度の深さにしか根を張っておらず、まるでタイルを剥がすかのごとくベリベリと、まさしく文字通り剥がれていくのです。「はて？」と思いすすきを剥がした後の地面を見てみますと、黄土色をしたカチンコチンの見事なまでの粘土質土壌なのです。まあこれくらいはたいしたことない、と農作業経験が限りなく０に近い私たちは、野菜市の利益で手に入れたシャベル、三つ又鍬、つるはしをふるって、三つ又鍬の刃、柄を折りながらも各々の畝を作っていきました。そしてそれぞれの畝ができると、感慨にひたる間も無く、各人、思い思いの作物の種を蒔きました。そのうち早くも大豆が二畝ほど一斉に芽を出し、きれいだなあと感嘆しておったのですが、それらの大豆がちょうど本葉を２，３枚広げた頃に、悲劇的出来事が起こったのであります。一夜にして、その本葉の部分がひとつ残ら

ずきれいさっぱりと、何者かによって食べられてしまったのです。それから堰をきったようにして、次々と出てくる作物の芽も全て食べられました。おそらく、というよりは確信に近いものですが、作物を食べた者は鹿でしょう。鹿らしき糞や足跡は開墾していた頃からありましたし、実際に私は２回程、畑で鹿を目撃しているものですから。色々と考えた結果、これからの畑の方針としては、鹿が食べない作物を育てるということに落ち着きそうです。また仲間には狩猟免許を持つ者がいるので、冬には鹿を獲って食べることも考えています。防鹿ネットや電気柵をめぐらすことも考えましたが、お金もかかりますしいずれも難点があるということで見送りました。現在、ちょっとやそっとの食害ではやられないと思われるぐらいの量の緑肥植物の種を蒔き、隣の赤松林から腐葉土をもってきて、土を肥やすことに専念している状況です。ちなみにその赤松林でも松茸を生やすべく、大掛かりな手入れを始めたところです。

ぜひ一度、野菜市に来てみてください。

（いいづかひろあき＝農学部２回生）

団地調査の報告

藤本菜保

農薬ゼミでは去年の年末、京大近くにある高野団地で、省農薬ミカンに関するアンケートと選好調査を行いました。目的の１つ目は、省農薬ミカンを消費者がどのように評価するかを知ることであり、２つ目は１９８３年に農薬ゼミで、「省農薬でミカンを作る一選好・試食調査」と題して消費者の選好・消費動向に関する調査を行っており、その後２０年経て消費者の好みはどのように変化したかを知るためでした。

選好調査というのは、省農薬ミカンと、農薬を普通に使用して作られた市販されている一般的なミカン（防除ミカン）を混ぜて広げておき、その中から「自分が食べたいと思うミカン」を選んでもらい、どんなミカンが選ばれたかを集計するものです。

アンケート調査では、ミカンを食べる量や購入するときに何を重視するかや、どこで購入するかと入ったことを尋ねました。

まず２０年前は、選好調査で実際に選ばれるのは、農薬を使用して作られた外観のきれいなミカンという傾向がありました。その一方で、ミカンを購入するときの基準を尋ねたアンケートの結果は、値段・銘柄・味・鮮度・ノーワックスを重視するというものでした。銘柄・味・鮮度という品質に関する品目が上位に

C O L U M N

みかんの木はどこで買える？

タイの学生がみかん山へ見学にくることになった。案内役を務めたはいいが、みかん山への道は、中型バスにはちょっと狭すぎたらしい。バスの屋根にあるアンテナが木にひっかかってはずれる…というハプニングもありつつ、何とかみかん園に到着。タイの学生たちは、天敵を用いた防除に興味津々。仲田さんに群がって、次々に質問をした。そのうち一人が「このみかんはとてもおいしいから、木を持って帰りたいんだけど、どこで買える？」と聞いてきた。まさか「木が欲しい」と言われるとは。何とか納得してもらい、みかんだけであきらめてもらったのでした。

入っており、大きさ・色つや・形のよしあしといった外観（品位）を重視する人は少数でした。つまり消費者自らは品位を重視していると思っているが、実際の行動とは矛盾したものであることを示しています。

さて、今回の調査では、省農薬ミカンと防除ミカン、あるいは病害虫のあるミカンとないミカンが、ランダムに選ばれた場合とほぼ同様に選ばれていました。アンケート調査では、２０年前と変わらず、味・鮮度・安全性・産地という品質に関する項目が重視されていました。病害虫の付いているのは省農薬ミカン、といった品位と品質を結ぶ知識が広く一般に浸透してきた結果、品質を求める消費者が外観の綺麗さに惑わされることなく安全なミカンを選ぶ傾向がうかがえます。また、購入するときに「安全性」を基準としない消費者も「病害虫あり」のミカンを選んでいることから、省農薬の品位が全体的に向上しているとも言えます。

この変化は世間一般において、省農薬・無農薬の農産物が手に入りやすくなったことや、食の安全性への関心が高まってきているためでしょう。しかし、まだまだその数は少数であり、ほとんどのスーパーでは大きさや形のそろった農作物が艶やかな表情をして並べられています。

消費者が安心して食べられるということは、作り手である農家の人にとっても安全に農作物を作ることができるということでもあります。消費者の「安全なものが食べたい」という思いと、農家の人の「安全に作りたい」という思いがうまく通じ合えば、現在の流通システムも変わるのでしょうか？農薬ゼミで考えていきたいと思います。（ふじもとなほ＝工学部４回生）

＊　＊　＊　＊

今回農薬ゼミで行った「選好・アンケート調査」報告書をご希望の方は、農薬ゼミまでご連絡下さい。

〒 606-8227
京都市左京区田中里ノ前町 21
石川ビル 305
E-mail　kgrap@kais.kyoto-u.ac.jp

今年の農薬ゼミ

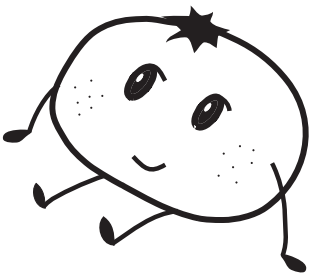
山崎香織

本年の農薬ゼミは、「現在進行形の農薬問題」とは何かを探るために、まず農薬関連の研究・市民活動を長年行ってきた中南元氏、植村振作氏の連続講演会「環境問題ことはじめ」を行い、農薬問題の変遷について知る機会となりました。次に、最近の農薬に関する基礎データ（農薬登録数、中毒事例など）や、主要作物に用いられる農薬の種類や省農薬の取り組みを調べ、農薬をとりまく現状について考えました。また、「２０年目の琵琶湖調査団」の方に、琵琶湖の農薬調査の結果を報告していただき、農薬の動向や残留について議論しました。

その他、豊島産廃問題や奇形ザル問題などに関して、メンバーが自ら環境問題の現場に足を運び、報告を行いました。長年に渡って問題解決のために努力してきた方々の話を直接聞き、自分の目で現場を見ることは、それを過去の話として終わらせずに、成功も失敗も含めて今後に生かしていくために重要であることを感じました。

みかん園に関しては、今年の２月に、

作業効率向上の観点から、密植している区画で５０本程度の間伐を行い、病害虫・収量の経過を追いながら間伐の影響を調査しています。また、昨年１２月に行ったみかん選好・アンケート調査をもとに、消費者からみた省農薬みかんの評価や、現在の消費者の好みについて分析を行い、報告書としてまとめました。（やまさきかおり＝農学部４回生）



C O L U M N

みかん会計のつぶやき

みかん注文が始まる時はいつも、ほんの少し緊張する。「売れるかな・・・」
そんな心配をよそに、続々と注文は集まってくる。これって、すごい。おなじみの人からはじめましての人まで、多くのお客さんが、仲田さんの省農薬みかんを楽しみにしているのを実感する一瞬だ。遠くに住む家族への贈り物や、お世話になったお礼を込めてお歳暮として、私たちのみかんを選んで下さる方もいる。みかんを送り出す仲田さん夫婦、橋渡しを担う農薬ゼミメンバー、これまでみかん園を支えてきた人たち、そして注文した方の想いがこもったみかんなんだな、と販売作業をやる手にも力が入る。・・・最近、注文書や振込用紙に書かれたお客さんの一言が、何よりも励みになっていることにふと気づいた。これが「顔の見える関係」、そして「声の届く関係」なのかもしれない。

京大農薬ゼミ

自主活動ゼミ
1978 年京都生まれ
京都大学農学部
1967 年和歌山のミカン園にて起きた農薬中毒事件をきっかけに、「農薬は減らせる」を合い言葉に、学習活動を続けています。ゼミの特徴は、単に「農薬は減らせる」と主張するだけではなく、和歌山のミカン園をフィールドとして、実際に農薬を省いたら農業はどうなるのか、農薬を減らして栽培したミカン園では害虫や病気がどのようになるのかを、栽培に関わりながら実践的に調査研究を続けてきました。その調査のための基本となる農薬や環境に関する知識や理論を勉強するゼミを毎週金曜日に開催しています。興味を持って下さった方は、お気軽に下記の問い合わせ先にご連絡の上、是非一度足をお運び下さい。
著作：『省農薬ミカン栽培の可能性～病害虫被害解析と経済分析～』（1996）

ニュースレター　第 16 号

発行所

京大農薬ゼミ
〒 606-8227
京都市左京区田中里ノ前町 21 石川ビル 305
TEL&FAX　075-711-4832(市民環境研究所)
E-mail　kgrap@kais.kyoto-u.ac.jp
URL　http://dicc.kais.kyoto-u.ac.jp/KGRAP/homepage.html

2004 年 12 月 11 日　第 1 版発行

ミカンや農薬ゼミに対するご意見、ご批判、ご要望などございましたら、どのようなことでもお寄せ下さい。
みなさまからのお声を励みにして、これからも活動していきたいと思っております。